



プロバスだより

第322号

2022年9月8日発行

編集・発行：情報委員会

東京八王子プロバスクラブ

創立 1995 年 10 月 18 日

2022～2023年度 テーマ

プロバスライフを元気に楽しむ すこしずつ動きだそう

第 322 回 例会 中止

1. 会長挨拶

池田会長

8月例会はお休みになりました。

暑い日が続きますが、皆さんお変わりありませんか。

コロナ禍がまた広がっています。8月4日開催の理事会で検討の結果、8月例会はお休みすることに致しました。「少しずつ動き出そう」と新年度がスタートしたばかりなのに残念ですが、連日の異常な暑さの中、コロナの感染者数の増加と医療体制の逼迫状況をみると慎重にならざるを得ません。どうぞご理解ください。

八王子祭りも中止と聞きました。今年もまた楽しみ少ない夏になりますが、もうしばらく辛抱しましょう。

8月誕生月の方のバースデイカード、卒寿のお祝いは9月の例会でお渡します。秋には全日本プロバス協議会の全国大会も控えています。晴れて「元気でプロバスライフを楽しむ」日のために、引き続き体調管理に努めてくださいますようお願い致します。



2. 理事会での審議内容概要

日時 2022.8.4 (木) 13:00～15:00

場所 八王子市役所北野事務所

1. 会長

7月の総会、例会、ありがとうございました。これからも、改革やプロジェクト等、いろいろとありますがよろしく願いいたします。

2. 8月例会の開催について（開催/中止の協議）

理事全員に開催の可否に係る意見を求めたところ、大半の理事から、最近の感染者の増加状況か

ら開催できる環境にない旨の発言があり、さらに、八王子祭り（市長が会長の）も急きょ中止になった旨の発言もあり、例会の中止を決定した。

本件につき各委員長より連絡網を通じ中止の連絡を周知徹底する旨確認した。

3. 卓話について

8月例会の卓話は、8月15日の終戦の日に因んで、昭和一桁生れの会員の方々から「77年前の8月15日・終戦の日の貴方は」のテーマでお話を聞く予定でした。しかし、8月例会が休会となりましたので、講演予定の6人の皆様から原稿を寄せていただきました。お話に代えて掲載をしました。

私の戦争の終り

立川富美代

昭和20年8月15日の玉音放送は、疎開先の香川県高松の田んぼの真ん中の農家の縁側で聞きました。真っ青な夏空でした。朝から晩まで人影を見るとバリバリと機銃掃射をして来る艦載機が、これで来なくなるとしか思いませんでした。



昭和19年春にはラジオ放送は、朝晩のニュースのみで全く静かで、時々「軍艦マーチ」が元気に響きますと「西部軍管区情報 - ○○日南方海上にて敵空母撃沈せり」。また、「海行かば」が演奏されますと日本軍が負けたときです。日に日に「軍艦マーチ」がなくなり、「海行かば」ばかりになり、19年7月頃日本の南の島サイパン、テニアン、アッツなどが玉砕して、そこからアメリカのB29がどどんと飛び立ち、日本本土の大中小の都市の空襲が始まりました。

ラジオは空襲警報と警戒警報だけで、昭和20年3月の東京大空襲は東京全部が火の海になりました。

私の住んでいた高松の田んぼの回りまで空襲で焼けてきました。敷布団を被って隣の田用水に浸かって、B29の姿を追っていました。新聞もなくなり、広島原爆投下も3日後にうわさで「新しい爆弾らしいよ」と聞いたくらいでした。

玉音放送の翌8月16日の夜、5日ほど赤痢で寝ておりました母が息を引き取りました。母は33歳、兄15歳、私14歳、同じ赤痢で寝ていました弟は4歳でした。隣のおじさんが、大八車で田んぼのはずれの焼き場に運び野辺送りをしました。翌朝兄と二人で母の小さな骨を拾いました。病気の弟を見守り、子ども3人が肩を寄せ合って、今日は終わっても明日のない日々を送りましたが、どのようにして生きてきたか思い出したくもありません。

8か月目に香港で行方不明だった父がよれよれになって引き上げて来ました。父が復職し子ども3人が神戸に帰り、私は又学校に通い始めて私の戦争は終わったのでした。

一緒に戦って生きた兄は33歳で母を追って亡くなり、母から命を貰った弟は今も元気です。お姉ちゃん、後少し長生きしろよ、おかあちゃんの80回忌をしような、と言っております。

からす部隊

私の出身地は山梨県上野原町(今は市)で昭和11年に、当時は尋常高等小学校に入学(4年生のとき国民学校に変更)し、終戦時は高等科の2年生でした。実家は農家でしたので、戦時中授業は一切行なわれず、校舎内の便所の汲み取り清掃と当時グラウンドをいも畑として耕しておりました。農家以外の家庭の生徒は軍需工場に動員されて兵器関係の製作に従事していました。

8月15日の終戦、その後の庶民の生活は困窮を極めました。小生の農家でも、それまでは収穫した米などは、ある程度保有米として食料を確保することが認められていましたが、終戦間近には全供出の指令で在庫が殆ど尽きてしまっていました。

さあ、どうするか。わが町と周辺の町村は配給米も途切れて、食料の確保に迫られ、窮地に追い込まれました。そこで対応策として考えたのが、冬の間

当地域で生産される木炭をもって食料と物々交換をするという手段でした。当時は食料生産に押されて、木炭の生産も手薄になっていましたが、自家用を節約して、燃料の少ない埼玉県の穀倉地帯に炭俵を担いで物々交換という拠に出ました。

彼の地方は逆に木炭は少なく、両者阿吽の呼吸でしたが、やはり食料の方が優位で「からす部隊」(当時、そう呼ばれていた。)はかなり苦戦を強いられました。昭和20年秋から昭和21年春にかけて、毎朝中央線上野原近辺から炭俵を担いだ、若い男達が列車の窓から溢れるばかりに乗り込みました。そして中央線、西武線から川越線成増方面まで出掛けたものでした。

疑問なのは、先方の農家には交換する穀類があったということでした。こちらは助かったから大声では言えないが、全供出ではなかったのかということでした。また、ある農家のおっかさんが、我々が汗をかいて庭先に辿り着いたとき、握り飯を出して来てくれたことがありました。あの人の親切さは涙が出るほど嬉しかった。

その後、一時盛んだったこの「からす部隊」も、当時発令された物価統制令により、間もなく官憲の取り締まるどころとなり、残念ながらその雄姿と決別することになりました。

話は戻りますが、物々交換の帰りに時たま新宿に寄りましたが、見渡す限りの焼野原で昔の新宿の姿は全く留めていませんでした。バラックの点在する街には、戦闘帽を被った帰還兵の姿を沢山見かけました。

太平洋戦争の悲惨な結果は、ご承知の通り死者310万人にのぼり、国土は東京を始め、全国の主要都市は米軍機の空襲により廃墟と化し、特に世界で初めての原子爆弾の洗礼を広島、長崎の都市が受け、人、物、歴史のすべてが灰燼に帰したのでした。

これから私たちは、核武装は絶対に廃止し、国連による世界の安全保障の実現に努力し、世界に平和が訪れることを心から祈りたいと思います。

「77年前の8月15日」・その年私は

竹内 賢治

昭和20年3月

福井市立宝永小学校6年を卒業、4月に福井県立

東山 榮



工業学校紡織科に入学。戦時下であり紡織科の講義時間は大幅に削られ、防空壕の穴掘りと軍事訓練に明け暮れた。勿論、他の学科や英語の ABC は習った覚えすら無かった。



7月28日 米軍機の爆撃により、一夜にして福井市街、工業学校も焼失した。父親の実家（福井県丹生郡天津村御油）に疎開。

8月15日 天皇陛下のお言葉が放送されるとのことで、隣の正願寺の離れ座敷の縁側でラジオ放送を聞いた。寺の和尚さんは若い時、西本願寺から「ハワイ」へ仏教の布教に派遣されていたそうで国際派でもあった。

部落の住民は天皇の言葉にしがみつく様に聞き入り、進駐軍が来たら、女子供はどうすればよいのか、和尚さんの言葉を真剣に聞き、若し進駐軍が来たら、女子供は裏山に逃げ込む事に落ち着いた。然しそのような心配事は全く無かった。

工業学校が焼失し、取り敢えず福井中学校の教室を借りて授業が再開されたが、私は福井の向う端まで通う手段が無く、退学届けを出した。

その後2年間、疎開地で生活をした。まず、天津村の尋常小学校高等科へ入学し、2年卒業時に制度改革があり新制中学3年（義務教育）・新制高校3年となり、新制中学3年生になった。

9月 福井市内の元の場所に2階建ての家を建て、福井市へ戻った。

終戦の思い出

矢島 一雄

戦後77年が経過して、あの暑い8月の夏が又巡ってきた。私は昭和7年生まれの90歳、戦争中は当時の労働力の不足を補う目的から、学徒動員令で学業の途中で軍需工場などに強制的に動員された最後の学年である。



私の動員先は、八王子鉄道管理局の電力区電灯分区と言って、管理局管内の電気施設などの新設や保守管理が仕事であった。支給された青い作業服を着て、腰に電気屋の七つ道具を付けたベルトを巻き、竹梯子を担いでの作業は、一定の体力を必要とした

ものの、毎日が刺激の連続で結構楽しかったのを覚えている。

8月15日は重大な放送があるという事から、全員が聞くようにと指示があった。暑い盛りの中、貨物ホームに集まると放送が始まり、雑音が多く聞きにくい箇所があるものの、どうやら日本は連合国のポツダム宣言を受諾して、無条件降伏し、戦争が終わったという事であった。

放送が終わると、勤労学徒は明日から学校へ戻るようにと指示があった。仲間と急いで職場に戻ると、所属長から改めて、明日からは学校に戻るようにと指示があり、身の回りの整理をし、終わり次第帰宅してよしいとの許可がおりた。

世話になった皆様に別れの挨拶を済ますと職場を後にし、短かった私の勤労働員の夏は、終戦と共に終わりを告げた。

8月15日

浅川 文夫

昭和20年8月、私は12歳、国民学校(小学校)6年生でした。長野県北部の小さな村で生まれ育ちました。8月15日重大な放送があるからと、ラジオのある家(当時はあまりありませんでした)に近所の人達が集まりました。その中に15歳から45歳の男の人はいませんでした。私も20歳で、召集される前に予科練か志願兵として出かけ、お国の為に、陛下の命ならばいつでも死ぬると覚悟していました。



ラジオでは戦争が終わったとか、負けたとは言いませんでした。聞こえてきたのは、鉦をおさめ、万世の為に太平を開かんと欲すという事でした。放送が終わったその場は異様な静けさでした。小さな声で、終わったんだねと言い、小さく頷くだけでした。ただ肩の力が抜け、なんとなく、ほっとしたような、霽囲気でした。あまり声も出さず、みな解散してしまいました。

私はその時、教育される怖さに愕然としました。学校における教育や社会全体から受ける教育が、人間をどうにでも変える事ができる恐ろしさに、心身に震えたのです。8月15日、その日は、雲ひとつない青空でした。その紺碧の中に自分自身が溶け込んでいくような気分でした。

一九四五（昭和二〇）年八月十五日前後
—小学五年生の日記から— 橋本 鋼二

1945年8月2日未明、八王子大空襲を実体験した。市街地の大部分が空襲で焼け、市立第一国民学校（現在の第一小学校）は鉄筋コンクリート建ての部分も含め全焼、横山町三丁目、現在のみずほ銀行の東隣にあった父の経営する書店も灰燼に帰してしまった。ひよどり山の麓（現在の暁町）にあった自宅には三発の焼夷弾が命中し発火、奮闘の末消し止めた。私も中学1年の従兄弟とともに、庭にあった大型水槽から水をバケツリレーし、消火を手伝った。この家で、8月15日正午、天皇の終戦詔書放送を聞いた。正直、妙なアクセントで語られた内容についてはよくわからなかった。空襲を避けるため、灯りが外に漏れないようにしていた覆いを父が取り除いたのが印象的であった。

8月15日当日の日記は「天皇陛下におかせられましては、新型爆弾などにあつて、国民が殺されるのを見ていることは出来ないとおぼしめされて、ボツダム会談の条件をお受け入れになり、戦闘は中止されました。正午、陛下の放送を聞き、くやしいような悲しいような気がして何が何だかわかりませんでした。近いうちに、にくい青目の兵隊が、神国に入ってくると思うと胸が張りさけるような気がしました。帝国は、今や万やむを得ぬ立場に至ったのである」というラジオを聞き、くやしくてなりません。今にきつとこのかたきを取ってみせると心にちかいました」と軍国少年らしく書いている。

15日の前後も暑い日で、日記を見ると浅川へ水遊びに出掛けている。当時の浅川は清流だった。

8月21日には空襲で焼けた学校へ行ったが同級生の半分位しか来なかったことや家が焼けなかった人は三割弱、通知があるまで休みなどと記している。29日には低空をゆっくり飛ぶいろいろな米軍機のこと、9月4日には多数の米軍トラックが甲州街道を通るのを見たこと、赤十字のマークを付けた車やトラック、小型自動車などさまざまな米軍の車両を描写していた。小型自動車をジープと呼び始めたのもこの月であった。



俳句同好会便り

私の一句〈八月の句会から〉

河合 和郎

八月も句座は持てなかった。パソコンを使つての紙上句会は開けるが、生きた情報交換は不可能だ。本当の情報や感情は肉声でしか伝わらない。平穏な日々が早く戻ることを願つて止まない。

立秋や五感澄ませど気配なし 馬場 征彦

今年の異常な夏の暑さを的確に表現。立秋が来ても収まらない暑さ。中七の五感の措辞が秀。

花街の黒堀越しに蟬の声 野口 浩平

粋な一句。これで三味の音が聞こえれば言うことなし。世界遺産に芸妓さんも一役買っている。

終戦日防空壕に光さす 東山 榮

8月15日を境に世の中が一変した。重苦しい戦時体制の終焉。「光さす」がすべてを語っている。

思い出を肌に残して夏果つる 矢島 一雄

意味深な一句。きっと素晴らしい思い出が生まれたのであろう。「日焼けの跡」では無粋すぎるが。

幻のごとく光りて遠花火 池田ときえ

遠花火の幻想的な印象を一句に。幻のように過ぎ去った来し方には数多の想いが明滅する。

袋掛け山あい遥か富士の影 田中 信昭

葡萄や桃などの果実にする袋掛けの作業。遠景には富士の山が。スケールの大きい写生句。

紅の房どよめき揺れる百日紅 下山 邦夫

真っ赤な百日紅の花が咲き誇る様子を「どよめき揺れる」とした大胆な表現。一点集中が効果的。

一筋の航路の水脈や秋光る 飯田富美子

「光」が今月の兼題。航跡の水脈に視点を当て、「秋光る」とした季語の工夫が素晴らしい。

秋風や伝言板に「さようなら」 河合 和郎

人々が行き交う駅の伝言板。短い伝言の中に限らない人生模様が。どんな「さよなら」だったのか。

編集後記

今月号は例会中止のため、変則的な構成となりました。次号からは通常の編集状態に戻れますようにと願っております。 内山